

舞踊研究の動向と課題

－高等教育機関発行雑誌における舞踊関連論文の分析を中心として－

安則 貴香¹⁾

Tendency and Problem on Dance Studies

－main study on the analysis of treatise on dance published
in magazines of higher educational organizations－

Yasunori Yoshika¹⁾

Abstract

The purpose of this study is to clear the tendency and problem of dance studies to survey the past relational studies published in magazines of higher educational organization from 1950's to 2000's in Japan. In this work, all studies were looked up in NII scholarly and academic information navigator.

The result of this study may be summarized as follows.

- ① According to the classified list of dance studies designed by Prof. KATAOKA Yasuko, all studies were classified. The result of classification made two characteristic tendencies cleared. One is the gradual extension of field on dance studies. From 1950's to 1960's dance studies were led by studies in dance education, dance arts, dance presentation and so on. Since 1970's dance studies were extended to studies in dance history, dance sociology, dance anthropology, and dance psychology. The other is the large in quantity of studies in dance education. Especially the latter characteristic is remarkable in dance studies because studies in dance education have always been the nucleus of dance studies.
- ② To clear the problem of dance studies, this study attended to studies in dance education on school physical education. According to the classified list of studies in pedagogy of physical education designed by Prof. TAKAHASHI Takeo, relational studies were classified. Prof. TAKAHASHI classified studies in pedagogy of physical education by practical studies, theoretical studies, and fundamental studies. As a result of classification, the amount of practical studies was ranked first, fundamental studies were ranked second, and theoretical studies were ranked third. In the classified list of studies in pedagogy of physical education, theoretical studies have a role of mediation between practical studies and fundamental studies. It could be considered that the small in quantity of theoretical studies indicate the lack of consistency on studies in dance education on school physical education. Therefore the accumulation of theoretical studies was brought forward as a problem on dance studies.

Key Words : Dance studies, Dance education, Physical education

キーワード : 舞踊研究、舞踊教育、体育学

1) 専修大学社会体育研究所 Senshu University Health and Sports Sciences Institute

1. はじめに

舞踊¹⁾は、長い人類の歴史の中で時代とともに多彩な変遷を遂げてきた。我が国では、伝統舞踊と呼ばれる歌舞伎舞踊、上方舞、能といった古典芸能や、念仏踊り、盆踊り、風流踊り、神楽といった民俗芸能だけではなく、明治期以降、海外より移入されてきたバレエ、モダンダンス、ジャズダンス、コンテンポラリーダンス、タップダンス、社交ダンス、フォークダンス、フラメンコ、フラダンス、エアロビクスダンス、ストリートダンスなど、今日の舞踊は一つの文化としての地位を確立するに至っている。現在、「踊る」「みる」といった舞踊への関与形態に関わらず、また老若男女を問わず、人々が何らかの形で舞踊に接する機会は多様化している。

このように舞踊文化が拡がりをみせる一方で、舞踊に関する初期的研究は主として体育学を中心に、芸術学、文学で展開され、多くの研究成果が蓄積されてきた。舞踊研究の歩みをおおまかに概観すると、体育学においては「ダンス」が教科体育の実技種目に含まれていることから、創作系実技とその指導法に関連する研究が、芸術学ではバレエやモダンダンス、歌舞伎の実技とそれに関わる表象理論に関連する研究が、文学においては、能、歌舞伎、民俗芸能等の伝統舞踊を対象とした研究がなされてきたという²⁾。近年では、舞踊を心理療法に活用するダンス・セラピーに関する研究、文系研究者と理系（情報系）研究者の共同によるモーションキャプチャ・システムを利用した、舞踊の身体動作そのもののデジタルアーカイブ化とデータ解析を目的とした研究が積極的に行われるようになり³⁾、舞踊を対象とする研究は体育学を構成する専門諸科学とその親科学および隣接諸科学へと多

様な拡がりを見せてきている。

また、舞踊研究の推進母体となる学術団体の動向に注目してみると、1950年に設立された「日本体育学会」が我が国の舞踊研究が初めて研究発表と討議の場を共有する場を提供し、学際研究の場として諸科学の研究手法を用いた舞踊の探求がなされた。その多くは舞踊教育に関する研究であり、その大きな要因として舞踊が体育の教材として取り入れられ⁴⁾、定着してきたことが考えられる。その後1976年に舞踊学研究を専門とした我が国初の学会「舞踊学会」が、1996年には「比較舞踊学会」が設立され、舞踊の専門的な研究発表の場として活発に活動されるようになるにつれ舞踊研究はより専門性を増し、量的拡大、質的向上が顕著にあらわれてきた。

このような舞踊研究の可能性とそれを取りまく環境が進展をみせていくなかで、本研究では今後より一層の研究蓄積が見込まれる舞踊研究について、領域的な拡がりを包括的に把握し、また舞踊研究を専門とする研究者の興味・関心を把握することを目的として高等教育機関（大学・短期大学・高等専門学校）で発行された学術雑誌に掲載された論文に注目し、舞踊研究の動向を把握してその結果から舞踊研究の今後の課題を導き出すことをねらいとする。

2. 先行研究の検討

我が国において舞踊研究の多様化が進むなかで、舞踊研究の動向をとりまとめた研究が数点発表されてきた。その端緒は松本が日本体育学会における第1回大会から第20回大会（1950年～1969年）までの舞踊研究発表の動向を谷村が設定した体育学研究分類文献目録⁵⁾を参考にまとめたものである（表1）⁶⁾。この研

表1. 松本による舞踊学の体系

(松本千代栄：舞踊学の動向 学校教育の側面から「舞踊学」創刊号、舞踊学会、1978、p.7より転載)

内容	
演技	身体 演技者
舞踊	美・論 比較文化
舞踊史	芸術 民俗
教育史論	舞踊教育 教材史
創作	創作刺激 創作過程 創作集団 パースナリティ
作品	主題 作品構造
鑑賞	空間印象 イメージと動き イメージと集団 作品評定
運動技術	表情・空間 基本運動 習熟 動きのリズム・フレーズ
学習指導	民謡・民俗芸能 フォーク・ダンス 表現(リズム)遊び 創作
治療	舞踊セラピー
音楽	創作 伴奏
用語	概念・規定 用語基準

表2. 細川・松本による舞踊学の体系

(細川江利子・松本千代栄：「モダンダンス」理論とその周辺領域「舞踊学」第13号、舞踊学会、1991、p.20より転載)

1	舞踊
	演技(演技・身体)
	舞踊史
	舞踊教育論・史
2	舞踊批評
	創作者
	創作過程
	作品(テーマ・構造)
	動き(基本運動・習熟・リズム)
	鑑賞(イメージ・動き・群・鑑賞者)
3	音楽・照明他
	指導法
4	ダンス・セラピー
	障吉
	ノーテーション
	用語
5	研究動向
	民俗・民族舞踊
	社交ダンス・ジャズダンス・エアロビクス
	幼児のリズム・表現運動

表3. 小森による舞踊学の体系

(小森恭子：戦後の学校教育における舞踊教育研究の動向と特徴—国立大学紀要論文を中心に「高知大学教育学部研究報告第一部」36号、高知大学教育学部、1984、p.189より転載)

1. 原理	舞踊哲学・舞踊美学・舞踊史・教育史・教育論・実践論
2. 発達	リズム感・リズム知覚・形態・機能・運動能力・言語・リズム反応・表現能力
3. 運動技術	運動分析
4. 音・音楽	音の情調・リズムによるイメージ・音が与える影響
5. 学習指導	指導法比較・要素学習
6. 創作	創作集団・パーソナリティ・創作過程・内容と身方・態度・スケッチ・即興
7. 作品	作品構造
8. 鑑賞	空間配置・作品評定・感情価
9. 民俗舞踊	民謡
10. 古典舞踊	能・神楽・舞楽

表4. 舞踊学の体系

(片岡康子：舞踊研究のあゆみと舞踊学の体系『舞踊学講義』大修館書店、1991、p.157より転載)

(1) 舞踊そのものに関する一般理論の体系

舞踊美学・芸術学	舞踊論、様式論、作品論、演技論、演者論、作家論、身体論、批評論、芸術論等
舞踊史学	各舞踊領域の歴史、人物史等
舞踊社会学	現代社会と舞踊の機能、社会行動としての舞踊等
舞踊人類学・民族舞踊学	各民族・民俗の舞踊、比較舞踊等
舞踊心理学	コミュニケーション論、身振り・表情・表言論等
舞踊教育学	舞踊教育思想、舞踊教育史、舞踊教育論(目標、学習内容、カリキュラム、方法論等)

(2) 理論体系の実際の適用に関する応用領域

舞踊上演法	振付・構成法(音楽構成を含む)、演出法(衣装、美術、照明等を含む)、演技法、記譜法等
舞踊療法	ダンス・セラピー、ヘルス・ケア、身体調整法等

究を下敷きとして細川・松本が新たに分類設定(表2)を行い、日本体育学会の第21回大会から第28回大会(1970年～1989年)までの舞踊研究発表の動向を整理し⁷⁾、これを受け継ぐかたちで寺山が細川・松本が提示した分類設定に従って1990年から1996年にかけて日本体育学会の機関誌「体育学研究」に掲載された舞踊関連研究の動向をまとめている⁸⁾。

日本体育学会以外の舞踊研究の動向をとりまとめたものとして、小森は松本が提示した分類設定に変更を加えて(表3)全国の国立大学の中から教育学部、保健体育専攻の大学院を有する54大学を選択し、各大学発行の紀要に掲載された舞踊研究の動向を整理している⁹⁾。

また片岡はアメリカの代表的な舞踊学会「Congress on Research in Dance(CORD)」の機関誌「Dance Research Journal(DRJ)」に注目して、自らが考案した舞踊学の体系¹⁰⁾に基づき同誌に1980年代に掲載された論文の検討から当時のアメリカにおけるモダンダンスとバレエに関する研究動向を概観し¹¹⁾、その後新たに舞踊学の体系を整理している(表4)。さらに遠藤は1990年代以降に我が国で学問的基盤を形成していった舞踊人類学の国際動向について、アメリカとヨーロッパで取り組まれた当該領域に関する研究論文およびそこから

派生した研究論文に限定し、草創期、確立期、転換期の3区分から各時期の両地域における研究の特色をまとめている¹²⁾。

1990年代までの舞踊研究の動向をまとめた以上の先行研究では当該時代の舞踊研究の広がりや網羅することを意図して様々な分類設定が試みられている。この延長線上で舞踊研究の著しい多様化傾向がみられる2000年代についても射程に入れた本研究では、片岡が提示した舞踊学の体系(表4)が近年の舞踊研究の広がりとして顕著な社会学研究、人類学研究、心理療法研究を網羅できるものと判断し、片岡による舞踊学の体系に依拠して本論を展開していく。

3. 高等教育機関発行雑誌における舞踊研究の動向

日本における舞踊研究の動向を明らかにするために、国立情報学研究所・論文情報ナビゲーターシステム「CiNii」の雑誌記事索引で、論題名の項目に「舞踊」「ダンス」をキーワードとして表示された論文(舞踊：9236件、ダンス：12916件)のうち、2008年3月までに高等教育機関で発行された紀要、年報等の学術雑誌に掲載された舞踊関連論文(1212件)に限定して舞踊研究の動向を探った。分類領域は表4のとおりである。

表5. 高等教育機関発行の学術雑誌における舞踊関連論文の領域別分類数

舞踊そのものに関する一般理論の体系

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年1月～ 2008年3月まで	合計
舞踊美学・ 芸術学	3	12	17	17	46	65	160
舞踊史学		4	5	17	24	55	105
舞踊社会学		2	1	6	13	12	34
舞踊人類学・ 民族舞踊学		7	10	21	20	32	90
舞踊心理学		9	23	35	41	37	145
舞踊教育学		8	27	59	57	50	201
合計	3	42	83	155	201	251	735

理論体系の実際の適用に関する応用領域

	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年1月～ 2008年3月まで	合計
舞踊上演法		8	21	35	57	43	164
舞踊療法					6	21	27
舞踊教育学	3	22	35	51	90	85	286
合計	3	30	56	86	153	149	477

この分類体系から舞踊研究の動向を年代別にまとめたのが表5である。「CiNii」の雑誌記事索引からは、高等教育機関で発行された学術雑誌において1953年に舞踊美学に関するもので劇作家であるウィリアム・バトラー・イェイツの舞踊詩劇と日本の能について検討したものを端緒とするが、1950年代の論文件数は極めて少ない。そこで以下、舞踊研究が本格的に始動する1960年代を筆頭として各領域別に舞踊研究の動向をまとめていく。

(1) 舞踊そのものに関する一般理論の体系
(舞踊美学・芸術学)

1960年代は現代舞踊の美学についての様式論に関するものが多かったのが、1970年代に入りモダンダンスやポストモダンダンスの概要をまとめたものをはじめ、舞踊の構造論、基礎理論に関するもの、舞踊美学的立場から舞踊の本質を論究したものが多数確認された。1980年代は1970年代とそれほど研究数に変動はないが、新たな研究展開として現代舞踊論

を中心とした身体表現の概念を検討したものがあげられる。1990年代は1980年代との比較で3倍近くに論文数が増したことが特筆される場所である。モダンダンス論をはじめ、舞踊と身体、舞踊作品の物語性や言語的解釈、舞踊の意味形成等、文学、哲学の領域から表象文化論的な研究が多く展開されるようになった。2000年代には、美学、文学、哲学からの身体論的、表象文化論的アプローチが活発化し、1990年代の延長線上で様々な舞踊像、舞踊論が提唱され、振付家による舞踊思想や作品批評論、コンテンポラリーダンス論といった研究がとりわけ増加している。

(舞踊史学)

1960年代は古代中国の舞踊を対象とした研究、ワルツの研究が確認され、1970年代は1960年代に引き続きワルツの研究に加えて日本舞踊史が研究されている。1960年代・1970年代とも論文件数的には大して変動は無いが、1980年代になると研究数が3倍に増え、モダンダンスの歴史や人物思想史、キリスト教の

舞踊史、琉球舞踊の歴史、日本の現代舞踊の成立過程、アメリカ黒人のダンスやジャズダンスの歴史等、研究内容においても拡がりを見せた。1990年代では、日本をはじめハンガリー、ブラジル、イタリア、アメリカの舞踊史、パリ万国博覧会におけるジャワの舞踊と音楽の関係性、アール・ヌーヴォー期における舞踊の服装史など、空間的にも時間的にもさらに研究の拡がりを見せ、2000年代にはいりドイツ表現主義舞踊、戦後日本のモダンダンス史、ルネサンス期の舞踊史、民俗芸能史など、当該領域の進捗が極めて著しい状況にある。

(舞踊社会学)

1960年代は欧米の舞踊家の渡来が日本の舞踊界に及ぼした影響を検討されたもの、フォークダンスと社会性についてまとめたもの、1970年ではヨーロッパにおけるメイ・デーでのダンスの意味等が検討されている。1980年にはいると論文件数が3倍以上に増え、生涯スポーツの枠組みから手がけられたダンス、エアロビクスダンスインストラクターの現状、創作ダンスクラブの発足と活動についてまとめたもの、またエアロビクスダンスやディスコダンスを代表とするアメリカの若者ダンスを考察したものが確認される。1990年代には、東アジアにおける現代舞踊の諸問題、生涯学習社会におけるダンス活動の意義と課題、舞踊家と舞踊公演に着目して日本における現代舞踊の特色を浮き彫りにしたものが確認され、2000年代では、中国の舞踊における現代性や都市の民族舞踊をモチーフとして、舞踊のボーダレス化の実態解明に取り組んだ研究、日本におけるダンス教室参加者の継続要因、フォークダンスサークルにおける会員間のネットワークの変化、ダンス公演のミニシアターに関する研究など、マネジメント的研究が新た

に胎動した。1960年代から2000年代までを通覧して論文件数は若干増えてはいるものの、他領域に比べると研究が停滞していることは否定できない。

(舞踊人類学・民族舞踊学)

1960年代は舞踊の民族的表現や、アイヌの民俗舞踊について考察したもの、岡山県の盆踊りの舞踊表現に注目したもの等があり、1970年代は1960年代とそれほど研究数に変動はないが、琉球舞踊とインド舞踊の動作比較、アイヌの舞踊、トルコ、イングランド、ポーランド、バリ等の民族舞踊、舞踊文化としての盆踊りの考察など、文献資料が主ではあるが研究対象の地域的広がりを見せた。1980年代にはいると日本の伝統芸能である歌舞伎や能、中国やオ族、南タイの舞踊、ギリシャやトルコの伝統舞踊、アジアとアメリカの比較舞踊研究等、1970年代に比べて3倍近く研究件数が増加した。1990年代には、件数こそ1980年代より若干減少したものの、中国や韓国・東南アジアの舞踊と日本の舞踊を比較検討したもの、アフリカの舞踊研究等が取り組まれ、フィールドワークに基づいた研究が本格化している実態が確認される。2000年代は1990年代よりも論文件数が増え、バリ島仮面舞踊劇、東スロヴァキア地域の民俗舞踊など、従前に注目されてこなかった地域（東ネパール、パプアニューギニア、北朝鮮、フィリピン等）の研究が進展し、研究フィールドが著しく拡大している。

(舞踊心理学)

1960年代は舞踊空間形成における表現性について論究したものや、舞踊表現のテーマによる内容分析を主眼とした舞踊鑑賞に関する研究が取り組まれている。1970年代は研究件数が3倍以上に増え、舞踊の鑑賞構造に関する

研究が多数を占め、その他に舞踊の創作過程における思考内容と運動の関係、動きの感情価に関する研究、舞踊認知の意味論的研究、舞踊運動における意味とその美的伝達性に関する研究等が取り組まれている。1980年代にはいると舞踊作品と鑑賞者との意味づけに関する研究が1970年代以上に圧倒的に多く見受けられた。その他、創作活動におけるコミュニケーション論、動きとイメージに関する研究や表現性に関する研究が認められた。1990年代は従来どおり舞踊作品と鑑賞者を対象とした研究が多いが、その他、舞踊作品からだけでなく伴奏音から舞踊鑑賞に与える影響等、音楽をも対象に取り込んだ研究が進展した。舞踊の感情伝達に関する研究、ダンス刺激と心理的音楽反応など、研究手法が著しく進展した研究が多く見受けられたのもこの時代の特色である。2000年代にはいると3次元動作解析による感情表現動作の分析、多変時系列解析など、高度なコンピュータ性能技術を駆使した研究が目立つようになり、動きとボディ・イメージに関する概念、体感による動きの感情価などが明らかにされている。その一方で、1990年代まで舞踊心理学領域の中心に位置していた舞踊作品と鑑賞者に関する研究は減少傾向を示した。

(舞踊教育学)

1960年代には学校ダンスの存在意義について論じたもの、創作舞踊の教育的価値を見出そうとしたもの、学校ダンスと「型」について研究したもの、戦前・戦後の舞踊教育を比較検討したものが認められるが、1970年代には1960年代よりも4倍近く論文件数が増加した。内容的には、舞踊の教育的意義、体育科における舞踊の位置づけ、学校教育における舞踊のあり方、学校舞踊の創作に関する諸問

題、舞踊教育の理念、学校ダンスの実態と問題点など研究対象が多岐にわたり、とりわけ舞踊教育思想や教育論に関するものが1960年代に比べて多く確認される。1980年代は1970年代に比べてさらに論文件数が倍以上に増え、ダンスの男女共修に関する研究、日本やアメリカの舞踊教育史、各国の舞踊教育カリキュラムに関する研究、舞踊表現の題材や教材に関する研究、舞踊課題に関する研究、創作舞踊における発表会の教育的意味、指導法の問題、体育と舞踊教育についての問題点等の研究が見受けられた。1970年代に多数を占めた舞踊教育思想に代わり、1980年代に入ると指導論、カリキュラム、学習内容へと研究の基軸がシフトしていったことが特徴的である。1990年代では1980年代と比べて論文件数的に変容はないが、従前より研究が蓄積されている舞踊の指導法の問題、国別のカリキュラム比較とともに、教員養成課程や大学教養教育における舞踊教育の位置づけ、ダンスの男女共修に対する教員の意識を調査したものなど、舞踊教育における当該時代の中心課題が様々な角度から検討されている。2000年代にはいると研究の視点が多様化し、ジェンダー論から男女共修のダンス学習に注目したもの、民族舞踊のカリキュラム化や養護学校へのダンス授業導入に関する研究といったものがその代表例としてあげられる。1960年代から2000年代における舞踊そのものに関する一般理論の体系の論文総数を見ると、舞踊教育学が735件中201件と最も多く、舞踊そのものに関する一般理論の体系から考えるに、舞踊教育学が舞踊研究の中心的位置を確保してきた実態が認められよう。

(2) 理論体系の実際的適用に関する応用領域 (舞踊上演法)

1960年代は舞踊作品について分析したもの、舞踊作品を創作する上で必要とされるリズムや音楽について検討したものが最も多く確認され、1970年代にはいると舞踊の伴奏音楽に関する研究、日本舞踊やモダンダンスの作品分析をはじめ、新たに舞踊創作の過程や空間形成の変容に関する研究が試みられている。1980年代は1970年代と同様に作品分析、舞踊創作過程に関する研究が多々見られたが、それに加えて舞踊記譜法¹⁴⁾に関する研究も取り組まれるようになった。1990年代は1980年代と同様に作品分析が中心であるが、伝統舞踊の保存を目的として、ラバノーテーションに代表される舞踊記譜法による作品分析が1980年代よりも活発に展開されるようになり、また演出法として照明や音響に関するもの、衣装製作、劇場空間をはじめとした演出環境を微細に検討する研究も取り組まれるようになった。2000年代には、舞踊記譜法による作品分析研究に加えて、舞踊のデジタルアーカイブ化に取り組む研究が目につくようになり、舞踊の保存がこの領域の一つの柱として定着しつつある。

(舞踊療法)

1980年代までは舞踊療法に関する研究は確認できないが、1990年代から心身の統合を目的としたダンスムーブメントセラピー（ダンス・セラピー）に関する研究が取り組まれるようになる。2000年代にはいると論文件数が倍以上に増加し、ダンス・ムーブメントセラピーによるストレスケア効果やダンス療法とコミュニケーション等の研究が取り組まれている。

(舞踊教育法)

1960年代の研究は、その大部分を体育授業における創作ダンスに関する実践研究が占めていた。1970年代では舞踊の創作指導法に関する研究、舞踊の技術・技能に関するもの、舞踊的身体の育成と体力との関係、ダンスの運動強度や呼吸数・心拍数について考察したもの、舞踊運動の筋電図学的研究や動作分析、ダンス観に関する調査研究、学習効果等の研究が確認された。1980年代の研究動向は1970年代のそれとほぼ同様であるが、そのなかにあって1980年代後半からエアロビクスダンスに関する研究が、社会での流行とともに非常に増加したことが目につくところである。1990年代は従来どおり指導法に関する研究が多々見受けられるが、それ以外に民族舞踊を題材とした授業研究、男女共修の授業実践、即興表現、エアロビクスダンスやジャズダンスをはじめとするリズム型ダンスの授業実践、ラテンダンスの身体機能の変化、ダンスの障害と予防に関する研究、障害者のダンス授業実践研究など、創作ダンスの枠組みを超えて多種多様なジャンルのダンス指導研究が展開されるようになったのが特徴的である。また論文件数が1980年代の倍近くに増加したことは特筆すべき研究動向としてあえられる。2000年代では、日本舞踊の体系化やモーションキャプチャを用いた舞踊動作解析、他分野とのコラボレーションによる総合芸術表現教育、車椅子ダンスや知的障害者のダンスプログラム、映像資料を活用したダンス授業実践など、研究内容は1990年代以上に明確に多様化している。1960年代から2000年代における理論体系の実際的適用に関する応用領域の論文総数を見ると477件あり、そのうち半数以上が舞踊教育法に集中していた。

以上で片岡が提示した舞踊学の体系に従っ

て高等教育機関で発行された学術雑誌における舞踊研究の動向を各領域別に概観した。舞踊研究の総合的な動向をまとめると、時間の推移とともに舞踊研究が様々な領域に拡がりをみせていることが理解されるが、もう一方で看過してならないのは、舞踊教育学・舞踊教育法を合算した舞踊教育に関わる論文数が他を圧倒していることである。これは舞踊研究が舞踊教育研究を基軸として展開されてきたことを指し示すものであり、この基軸は将来的にも揺るぎないものとして推測される。そこで舞踊研究の課題を次に導いていくに際しては、舞踊教育研究を基底に据えた論拠が必要とされるものと考えられる。

4. 舞踊教育研究の特色

舞踊教育の領域から舞踊研究の課題を浮き彫りにするにあたり、舞踊教育研究としてとりまとめた表5の「舞踊そのものに関する一般理論の体系」の「舞踊教育学」および「理論体系の実際の適用に関する応用領域」の「舞踊教育法」の該当論文計487件のうち、舞踊教育の根幹をなす学校体育に関わる論文計411件を抽出して、舞踊教育研究の特色を明らかにしていきたい。

その手がかりとして、日本の体育科教育学研究を牽引する高橋健夫が提示した体育科教育学の領域区分へ当該論文の分類を試みた。図1は、①体育科教育の実践（授業）そのものを対象として行われる「実践的研究」（授業

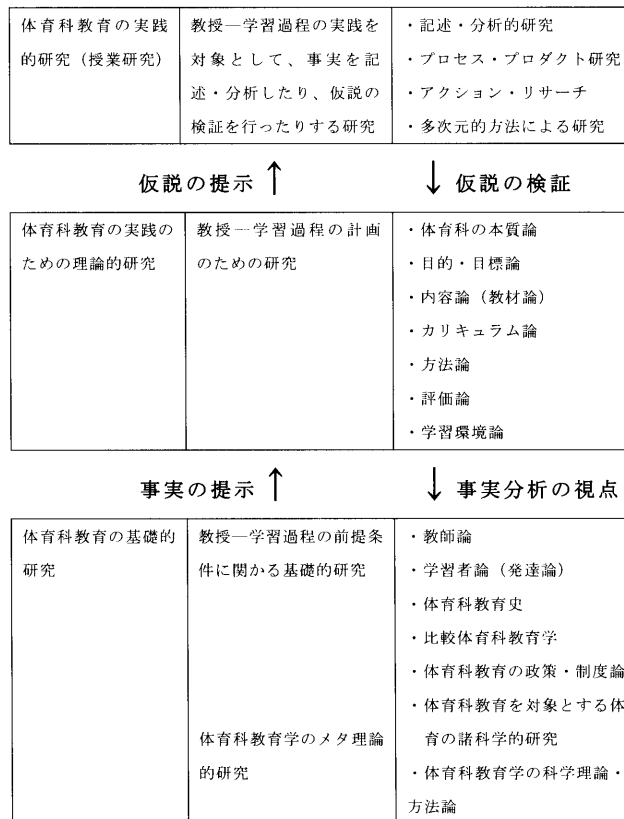


図1. 体育科教育学の研究領域の層

(成田十次郎・前田幹夫編：『体育科教育学』ミネルヴァ書房、1987、p.30より転載)

表6. 舞踊教育研究の領域別分類数

年	実践的研究	理論的研究	基礎的研究	合計
1950			1	1
1960	13	3	8	24
1970	33	12	8	53
1980	48	17	35	100
1990	77	19	31	127
2000	60	11	35	106
合計	231	62	118	411

研究)、②体育科教育の方法理念を体系的に明らかにする「理論的研究」、③体育科教育の理論や実践のための基礎的知識を提供するところの「基礎的研究」の3層から体育科教育学の研究課題領域が構成されている。

学校体育に関わる舞踊教育研究をこの研究課題領域に分類し年次別にまとめたのが表6である。合計の値から「実践的研究」「基礎的研究」「理論的研究」の順で論文数が多いことが認められる。まず最も論文数の多い「実践的研究」については、何よりもダンスの導入過程と符合した各ダンスの指導法に関する研究を軸として展開されてきたことが指摘される。学校体育に導入されたダンスの史的変遷を辿っていくと、1960年代、1970年代の学習者の主体的な学習を射程に入れた創作ダンスにはじまり、1980年代以降のエアロビクス、ジャズダンスに代表されるリズム型ダンス、2000年代以降のロックやヒップホップをはじめとする楽しく踊ることを目的とした現代的なリズムダンスや、フォークダンスに代表される外国の踊りだけではなく、自国の民族舞踊を教材化にしようとする試み等、多種多様化するダンスへの関心動向に合致するかたち

で、これらの指導法に関する研究が活発に取り組みられてきた。その他の代表的な研究について、男子もダンスの授業を履修することが出来るようになったことを受けて、男女共修の授業の実態について様々な観察法を用いて学習者の行動に注目した研究、体力・運動能力向上の観点からダンス授業における運動強度や呼吸数・心拍数を調査したものがあげられる。

「実践的研究」に次ぐ「基礎的研究」では、教育機関における舞踊教育の位置づけに問題の所在を据えた研究、舞踊教育思想史、地域別舞踊史、時代別舞踊史をはじめとする舞踊の一般史・個別史研究、諸外国の舞踊教育の動向をまとめた研究が主として認められる。ここで留意しなければならない点は、表5より舞踊教育研究に該当する論文のみを抽出した点で、そこから除外された動作解析による研究や舞踊上演法に舞踊記譜法に関する研究などは、学校教育の枠組みからはこぼれ落ちるものの、舞踊教育の「基礎的研究」に位置づけてしかるべき要素を十分に内包している。本研究では片岡が提示した舞踊学の体系に依拠して舞踊関連論文を分類し、そこから抽出

された学校体育に関する舞踊教育関連論文を高橋が設定した体育科教育学の研究課題領域に基づいて分類するという手順を採用したことから、その課程でとりわけ「基礎的研究」に該当する論文が捨象された感は否めないが、「実践的研究」の論文数に及ぶまでには至らないことは想像のつくところである。

最も論文数の少なかった「理論的研究」においては、舞踊教育そのものの意義や教育的価値に問題設定を据えた本質論的研究、海外の舞踊教育カリキュラムを報告した研究、多種多様化するダンスの教材論に関する研究が大半を占めている。図1から確認されるように「理論的研究」は「基礎的研究」と「実践的研究」のパイプ役を果たす位置づけがなされている。しかしながらここで明確にされた「理論的研究」の停滞状況は、「基礎的研究」における研究成果の発展性の希薄化や「実践的研究」の研究根拠の脆弱性を端的に示すものである。ここから懸念される事は、最も研究数の多い「実践的研究」に向けた仮説の提示が不十分で、逆に「実践的研究」で課題とされた仮説の検証が曖昧にされてきたことが十分に推測しうる点である。これは舞踊教育研究の学的一貫性の欠陥を如実に示すものであり、裏を返せばその時々のダンスムーブメントに迎合した「実践的研究」の一時的性格を暗に示すものとして捉えられよう。体育科教育学研究の全体像を把握したうえで「理論的研究」こそが、舞踊教育研究ひいては舞踊研究の課題として提起されよう。

5. まとめ—舞踊研究の展望にかえて—

本研究は高等教育機関で発行された学術雑誌に掲載された舞踊関連論文に注目して、舞踊研究の動向を把握したうえで、舞踊研究の

課題を浮き彫りにすることを目的としたものであった。そこで明らかにされた内容をまとめると、以下のとおりである。

- ① 片岡康子による舞踊学の体系に基づいて舞踊関連論文の動向をまとめた結果、舞踊研究の総合的な動向としては1953年の舞踊美学に関する研究を端緒に、1960年代から舞踊研究が舞踊教育学、舞踊美学・舞踊芸術学、舞踊上演法の領域で本格的に始動しはじめ、時間の推移とともに舞踊研究が様々な領域に拡がりを見せていった。さらに舞踊教育研究の論文数の多さが他を圧倒していることを特徴として、舞踊研究が舞踊教育研究を基軸として展開されてきたことが明確にされた。
- ② 舞踊教育研究の根幹をなす学校体育に関わる論文計411件を抽出して、舞踊教育研究の特色を明らかにするため、高橋が提示した体育科教育学の領域区分への分類を試みた。その結果、論文件数では「実践的研究」が一番多く、次いで「基礎的研究」、「理論的研究」の順となった。このなかで「実践的研究」における指導法研究の多さが通時的に変化のない点、「基礎的研究」は「実践的研究」に次ぐ位置となったが、分類作業過程において「基礎的研究」に組み込まれる可能性を多分に備えた論文が除外された点は留意せねばならない。
- ③ 最も論文数の少なかった「理論的研究」の停滞状況は、「基礎的研究」における研究成果の発展性の希薄化や「実践的研究」の研究根拠の脆弱性を端的に示すものであり、最も研究数の多い「実践的研究」に向けた仮説の提示が不十分で、逆に「実践的研究」で課題とされた仮説の検証が

曖昧にされている点である。これは舞踊教育研究の学的一貫性の欠陥を如実に示すもので、体育科教育学研究の全体像を把握したうえでの「理論的研究」こそが、舞踊教育研究ひいては舞踊研究の課題として提起されるところである。

註記及び引用参考文献

- 1) 本研究では「舞踊」をあらゆるダンスを包括したダンスの総合的概念として捉えていく。
- 2) 片岡康子：舞踊研究のあゆみと舞踊学の体系『舞踊学講義』大修館書店、1991、p.154
- 3) 代表的な研究に、立命館大学アート・リサーチセンターの八村らによるモーシオンキャプチャシステムを利用した舞踊・伝統芸能などの無形文化財関連資料の記録と保存、活用を目的とした研究がある（八村広三郎：舞踊とモーシオンキャプチャーデジタル技術による伝統芸能の記録と解析－「舞踊学」第29号、舞踊学会、2007、p.23-26）
- 4) 三浦弓枝：舞踊教育で今何が問題か「体育科教育」43-7、大修館書店、1995、p.13
- 5) 谷村辰巳による体育学研究分類文献目録は以下の通りである。

ダンス
舞踊
表現
創作
鑑賞
空間配置知覚
リズム
郡舞
民踊
フォークダンス
伴奏音楽
その他

（松本千代栄：舞踊学の動向 学校教育の側面から「舞踊学」創刊号、舞踊学会、

1978、p.7より転載）

- 6) 前掲書（5）、pp.7-10
- 7) 細川江利子、松本千代栄：「モダンダンス」理論とその周辺領域－1970・1980年代－「舞踊学」第13号、舞踊学会、1991、p.20
- 8) 寺山由美：舞踊学研究の動向「目白大学人文学部紀要地域文化編」第6号、目白大学人文学部、2000、pp.87-96
- 9) 小森恭子：戦後の学校教育における舞踊教育研究の動向と特徴－国立大学紀要論文を中心に「高知大学教育学部研究報告第一部」36号、高知大学教育学部、1984、pp.185-199
- 10) ここでの片岡の舞踊学の体系は下記の通りである。

舞踊美学
舞踊芸術学（作品研究・舞踊家研究・舞台美術）
舞踊史
舞踊人類学
舞踊社会学
舞踊教育学
舞踊記録法・資料検索
心理学
バイオメカニクス（解剖、生理、栄養を含む）

（片岡康子：モダンダンスとバレエ研究の現状－80年代DRJを中心に－「舞踊学」第15号、舞踊学会、1993、p.19より転載）

- 11) 前掲書（10）、pp.19-22
- 12) 遠藤保子：舞踊人類学研究の国際動向「体育学研究」44、日本体育学会、1999、pp.325-333
- 13) 舞踊記譜法とは舞踊の永久的記録のために考案された表記システムであり、最古の舞踊譜は15世紀半ばに遡ることができる。18世紀の職業的舞踊の起こりに伴い進歩を遂げてきたが、20世紀に、より普遍的で画期的な記譜法が現れた。ラバンの運動の形と質の理論より棒状記号を用いるラバノーテーション、バレエの振り

付けを記録するために五線を用いるベネシユノーテーションなどが生み出され、現在は両者とも舞踊運動に限らず、人間の運動に関するより広い分野に適応されている。(舞踊教育研究会編：資料編『舞踊学講義』大修館書店、1991、p.244)

- 14) それぞれの研究課題領域の包括範囲と留意点について、高橋は次のように説明している。まず体育科教育の実践(授業)そのものを対象として行う「実践的研究」(授業研究)は、実際の体育実践を対象にして、授業の中で生じる事実を記述・分析したり、仮説の検証を試みたりする研究で、つとめて臨牀的・処方的研究の性格をもつ。また、実践は、体育科教育の目的—内容—方法の一貫的原理に基づいて行われるが、しかし、実践的研究においては、教授内容や教授方法に具体化された仮説が分析され、評価され、検証されることになる。したがって、この研究は実証的・経験科学的に行われる必要がある。さらに、この実践的研究には、実践のある特定の教授技術(teaching skill)に着目し、その有効性を検証していくような部分的な研究から、単元全体を対象

に据えて、計画、実践、評価の全過程を総合的に研究するもの、さらには、学校全体の長年にわたる計画・実践、成果に基づいて、体育科教育の仮説的な原理(目的—内容—方法)を総合的に評価しようとする研究までが含まれる。次に「理論的研究」は、体育科教育の実践に対して方向を与える理念や方法原理(目標—内容—方法)を、理論的・解釈的に究明しようとするものである。そこでは、教育学的知識、体育科教育の基礎科学的知識、および実践的に得られた経験を総合・統合して理論化が図られる。しかし、ここで得られた知識はあくまでも体育科教育の仮説であり、仮説は「実践的研究」によって確かめられ、批判され、修正されなければならない。最後に「基礎的研究」は、体育科教育の理論を作り上げるための基礎となる研究である。体育(教育)を対象とした基礎的研究は、従来、体育諸科学の分野で分散して研究されてきたが、体育科教育学は、これらの研究を組織的に位置づけていくことが必要である(成田十次郎・前田幹夫編：『体育科教育学』ミネルヴァ書房、1987、pp.30-31)